
永戸美紀に関して言えば

蒼山 ケイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永戸美紀に関して言えば

【Nコード】

N5958T

【作者名】

蒼山 ケイト

【あらすじ】

日々アルバイトに追われる女の子、永戸美紀。趣味はスニーカー収集と、俳優Tとの結婚生活の妄想。

ある日彼女は、兄が交際中の女性と結婚を考えているということを知る。

*こちらの作品は自分のブログにも載せています。

名前、永戸美紀。
年齢、二十二歳。
現在、不機嫌。

『お疲れ様でした』の言い方をいつもより少し乱暴にした理由を数行後回しにして、まずは彼女の趣味がスニーカー集めであることを書きたい。

彼女の部屋には先月買ったのを合わせて三十二足、プーマだけで十二足ものスニーカーがある。

全て自分の部屋に置いている理由は、玄関に置いておくと母親がその上に、翌朝に出すゴミ袋をどっさり置いてしまっからだ。

一番のお気に入りはプーマの真っ赤なクライド。三年前にこれを古着屋で見つけた時、まるで自分に買ってもらうのをずっと棚の隅で待ってみたいだった、ということは何人かの友人に話したが誰にも相手にしてもらえず、彼女はえこひいきの気持ちを込めて、このスニーカーにだけ《レデイコ》という名前を付けている。

レデイコに足を通すのは特別な日だ。彼氏との初デートの日、アルバイトの面接の日、そしてTの舞台を観に行った日。

彼女はレデイコを履く時だけ、儀式のようにそつと足を入れる。まずは右足。つま先からかかとまでフィット感がいつもと変わらないうことを確かめてから、靴紐を丁寧に結ぶ。紐の長さは左右対称。締めすぎて足の甲を圧迫しないように気を付ける。

終わったなら左足へと移って、同じ儀式を行う。レデイコを履き終わるまでは誰とも話したくない。

彼女はふとした拍子に、靴紐を結ぶのを途中で止めてしまうことがある。

視線の先には、ただれたふくらはぎ。思わずマキシスカートの裾

を上げて、太ももまで見てしまう。水炊き鍋がひっくり返る瞬間の、五歳の頃の記憶が襲ってくる。

しばらく目を閉じてじっとしていると、映像は薄くなっていく。そして彼女は日常へ戻る。

美紀は現在、自宅から徒歩十分のショッピングセンターの二階にある、早口言葉のような店名の時計屋でアルバイトをしている。(残念ながら二店舗ある靴屋はいずれもアルバイトを募集していなかった)。

今日の昼過ぎに領収書の書き方と、保管すべきレシートを破り捨ててしまったことを店長から厳しく注意された。不機嫌の理由はこれである。

自分が悪いので謝りはしたものの、どうもすっきりとせず、夕方上がった後、三階の本屋に行つて無料求人誌を一冊リュックに入れた。あまり売れることのない高級な時計が、自分の接客によつていくつか売れたことを思い出しながら。髭を二日続けて剃り忘れてくる男にまったく評価されないことが退職の理由になるかどうかは、この際別問題である。

エスカレーターで一階まで下り、客用の出入り口から堂々と出て、広いことだけで有名な公園を横切っていく。

彼女がサードベース代わりの週刊少年ジャンプをまたいだ瞬間から、子供たちの野球は中断を余儀なくされる。夏の日差しはまだ強い。インディアンズの帽子を被つた男の子が急かすように、グローブの中心をぼんぼんと叩くが、彼女はそれに気付かずに求人誌を読んでいた。

『バーベキューにボーリング大会、オンもオフも僕ら充実してます！ スタッフの仲が良すぎるってよく言われます(笑)。ガンバリ次第でどんどん時給もアップするし、まかないも美味しいってスタッフの間で評判なんです！ 研修制度も充実して言うことナシ！』

こんな会社で誰が働きたいんだろうと美紀は思った。

帰宅して母にただいまあと言いながら、洗面所に直行する。手洗いとうがいをしてからカルピスを一気に飲み、二階へ上がって父の部屋のパソコンに向かった。

アルバイトを検索しだすも、そのうちにあくびが出始めて、気付けばTのブログを開いていた。

Tというのは彼女の好きな俳優のイニシャルである。主に映画、舞台で活動している中堅の俳優で、顔、背丈、私服のセンス、声、その他何から何までが彼女の理想そのものだった。嫌いな点がここにも見当たらなかったし、探す気にもならなかった。

Tよりも前に彼女が夢中になっていたのは、Sというイニシャルの男性で、これまでの美紀の人生において唯一の恋人だった。

彼は二歳年上でJR神戸駅近くの花屋で働いていた。昨年の母の日、カーネーションを買って三十円の釣銭を受け取った瞬間に、彼女は恋に落ちた。私は単純なのかもしれない、彼女は時々そう思う。きつく絞った雑巾のような彼女の皮膚に彼が触れたのは、それから三か月後のことで、その気になれば彼女はその夜のことをくつきりと思い出せるが、思い出そうとはしない。プールサイドで授業見学をしたすべての夏の日を、いちいち思い出すことなどないように。その恋が終わった今年の二月に、彼女は雑誌で俳優Tのインタビューを読んだ。

それまではテレビで何度か見たことがある程度で、まったく気には留めていなかったが、ページ一面に載った彼の笑顔と服装（スタイリストが用意したに違いない、ブルーのストライプのシャツにシアツカーのジャケット）、そして子供の頃に飼っていた犬が死んで、今でも年に一回家族揃って墓参りに行っているという話に心を鷲掴みにされてしまった。

それからというもの、一日に一度はTのことを考えるようになってた。

彼以上の男性はいない。彼と結婚できたらどんなに幸せだろうか。

彼の為ならどんなことだつて耐えられる。料理もイチから勉強する。掃除も毎日する。俳優業がもしダメになったら自分が何か資格を取つて働き、一緒に頑張ろう。子供はいてもいなくてもいいから、とにかく温かい家庭を持ちたい。

そして夜のベッドの中では　という妄想に差し掛かろうという時に、晩御飯の支度ができたという母の呼びかけが聞こえて、彼女は呼吸の仕方を間違えそうになった。

閲覧履歴を消してからパソコンの電源を落としたりリビングへ行くと好物のエビフライが白い皿にたくさん盛られていた。美紀は『エビフライ』という単語に、鼻歌ででたためのメロディを付けながら、コップに二人分のお茶を入れた。

美紀はニュースを見ながら母親に「これってどういうこと?」、「このニュース昨日もやってなかった?」などと言いつつエビフライをウスターソースとタルタルソースの両方で楽しんでいたが、気象予報士が笑顔で明日の降水確率がゼロパーセントであることを伝えるあたりで、箸を置きソファに横になった。

調子に乗つた数十分前の自分と、現在の胃のむかつきが一本のラインであつさり結ばれてしまう現実も手伝つて、七時から始まつたバラエティ番組は何も面白くなく、皿洗いをする母の「そのコンビ最近よう見るわ」という言葉に返事もしなかった。

胃薬を飲んだのが十五分後、風呂に入ったのがそれから四十五分後、兄から電話があつたのが風呂から上がった五分後のことだつた。その時美紀は紺のボードアのルームウェアに身を包み、部屋で長く真っ黒い髪を乾かしていた。テレビのボリュームも上げていたため、母の少し強めのノック音は丸まつた背中の一メートル手前で消えていた。

「ちよつと」と肩を受話器で叩かれて彼女は「うぎゃあ」と声を出し、マイナスイオンが出るドライヤーから鈍い音をさせた。

「言つとくけど、ちゃんとノックしたからね」

「何よもう」

「電話やんか。高志からや」

「おにい？」と美紀は額をさすりながら少し驚いた。

兄の高志は実家を四年前に離れ、東京で働いている。家に電話をしてくることなど、ほとんどない。美紀に用事がある時も、絵文字のない淡泊な内容のメールが二行ほど来るだけだ。

彼女は妙な予感を働かせながら受話器を受け取り、テレビのボリウムを下げながら、「ナンデスカ？」という機械的な声を出した。高志から聞かされたのは、東京で人気のドーナツショップが神戸にも出店するという話だった。

もっちりした食感と、控えめな甘さ。無添加で値段も安い。味の種類が少ないのが、かえって魅力的。店構えも店員さんの制服もすごくかわいい。美紀も絶対気に入るはず。ドーナツ好きやる？ 特にもシンプルなやつ。こっちで一回だけ食べたことあるけど、男の俺でも食べやすかった。聞いたことある？ このお店 そんな長ったらしい回り道をしてからの兄の報告に、美紀は三十秒ほど沈黙せざるを得なかった。

兄が口にした女性の名前に聞き覚えはあったが、顔はうつすらとしか出てこなかった。帰省した時に母に見せていた写真を、横から少し見ただけだ。確か同じ会社の後輩だったはずだ。

写真の中で彼女は花柄のパフスリーブのTシャツを着ていた。細い首、ゆるくウェーブした髪、右手のピースサイン、背景にどこかの釣堀の看板。

美紀が知っているのはそれだけである。

だから、『結婚を考えてる』と言われても、どう答えて良いか分からなかった。

受話器を持ったまま部屋の中を歩いた。「んー」という声を出したが続きは浮かばなかった。いい言葉が落ちていないものかと辺りを見回したが、スニーカーだらけの部屋からは、何も拾えなかった。もつと本を並べておけば少しは救われたのかもしれない、美紀は真

剣にそう思った。

いつ結婚するのか、結婚したらどこに住むのか、もう向こうの両親には会ったのか、そんな浮かんでくる質問を口から出すことが出来ず、さっきのドーナツ屋っていつ出来るの？ という大して興味のない質問が浮かんでこらえた。

もっさりした沈黙が続いた。

母は風呂に入るのをやめて、無音のテレビをリビングで眺めていた。高志はタバコに火をつけるのをやめて、受話器を持ち替えた。

美紀はSに電話で別れを告げられた夜のことを思い出した。その時彼女は携帯電話を耳に当てたまま三十分間何も話さず、棚と床に並んだスニーカーたちを見ていた。

スタンスミス、エアフォース、ウェポン、ポンプフューリー、オールスター……

ワンスター、サンバ、ガッツレー、ロンドン、ジャックパーセル、フォーラムミッド……

フットスケープ、オールドスクール、カントリー、スピードキャット、ターミネーター……

クライド……レディコ……。

「おい？」

「え？」

「何言ってるん？」

「え、いや、何でもないん。ごめん」

美紀は肩に受話器を挟んだままドライヤーのコードを巻いた。そしてクローラーを消して窓を開けた。向かいの家の屋根に乗っていた猫が、その音に驚いて飛び降りた。

通りに停まったバスから、何人かの乗客が降りているのが見えた。父がいるかどうかは分からなかった。木が風でかすかに揺れていた。遠くにテニスクラブの夜間照明が見えた。その上の月が薄くぼやけていた。

「今日な、」

「うん」

「エビフライ食べ過ぎてん」

「エビフライ？」

「そう。ウスターソースとタルタルソース。両方で食べたん」

美紀は静かに窓を閉めた。受話器の向こうで高志がタバコに火をつけたのが分かった。

「で、美味かったんか？」

「うん」

「そんな食べたんか？」

「うん。めっちゃ食べた。絶対太ったわ」と美紀は笑い、ベッドに座って蛍光灯の紐の先に付いたキティを手ではたいた。キティは大きく向こうに揺れて戻ってきた。もう一度はたく。またキティは戻ってくる。次に強めにはたいたら、ひとつ蛍光灯が消えてしまった。

「あつ」

「え？」

「いや……なあ……えつとな、私にこんな言われてもって感じかもしれないけどさ……フィアンセ連れて来てや」

「ああ。でも『フィアンセ』っていう響きはどうもなあ。名前でええやん」

「佐田……何さんやっ たっ け？」

「佐田翔子さん」

「ほんでな、佐田さんと二人で来た時にお母さんにエビフライ作ってもらったらええわ」

「せやな」

「気分悪くなるぐらいに食べたらええわ。ほんで二人で倒れてしよ
うもないテレビ見たらええねん」

「何やそれ」

「何でもないわ」

美紀は明日のシフトを確認してから、十二時過ぎに部屋の明かり

を消した。

無音になった部屋の中で彼女は兄のことを考え、自分のことを考え、アルバイトのことを考え、これからのことを考えてからまた兄のことを考えた。水炊き鍋がひっくり返った後、洗面器にいっぱいの水を入れた兄が走ってくる姿を思い出した。兄の就職が決まって、みんなで乾杯した夜のことを思い出した。

瞼を開いたら暗がりでキティがにじんでいた。手を伸ばしたが、届く距離じゃないことは分かっていたので、あきらめて眠ってしまふことにした。

美紀はその日、海で泳ぐ夢を見た。最初は小さな島を目指していたが、すぐにどうでも良くなってしまうた。あきらめるほど広く青い海には、美紀の他に誰もいなかった。彼女はそこで覚えたてのクロールをいつまでも試していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5958t/>

永戸美紀に関して言えば

2011年5月28日09時10分発行